

奈良県の沿革

大和は国のまほろば

紀元前3世紀頃、日本列島に稲作がもたらされると奈良盆地は豊かな米作地帯となりました。大陸の高度の文化はこの地に開花し、大和の地は我が国の政治・文化の中心地として中国にならい、都城藤原京(694年)・平城京(710年)が造られ、飛鳥・白鳳・天平の輝かしい文化が醸成されました。

その後、都が平安京に移ったため、一時平城の都はさびれましたが、やがて社寺中心に甦り、鎌倉時代には、大和の国は興福寺・春日大社の荘園で占められるまでになりました。

戦国時代、この大和の地も戦乱が絶えることなく、幾多の興亡が繰り返されましたが、その後織田信長の庇護のもとにあった筒井氏が大和を統一しました。

江戸時代には、綿花・菜種・小豆などの商品作物や、三輪そうめん・吉野葛・宇陀紙・奈良晒・大和餅・吉野杉などの特産品が、隣接する大消費地大阪・京都に運ばれ大和に富をもたらしました。

明治20年に現在の奈良県が誕生

明治維新を迎えると、慶応4年1月に大和鎮台が設置され、以後、行政区画の改廃が繰り返されましたが、明治4年には大和国を統一した奈良県が誕生しました。しかし、明治9年堺県に合併、さらに明治14年には大阪府に合併とめまぐるしく変化し、その中で、大和の人々は奈良県の再設置を粘り強く求め続けました。ついに、明治20年11月4日、奈良県の誕生を迎えることができました。明治21年1月9日には、第1回奈良県議会が東大寺大仏殿回廊において開かれています。

明治22年4月1日の町村制施行当時、10町142村2組合村で、人口は50万人ほどでした。その後県勢の発展にともない、昭和30年前後に市町村合併が促進され、現在では10市20町17村で、人口約144万人となっています。

環境との調和をはかりながら

奈良県は、気候・風土に恵まれているものの、海がなく河川に乏しいという条件もあって、明治以降も農業・林業が産業の中心でしたが、昭和38年から始まった奈良県新総合開発計画をはじめとする県勢の振興計画による産業基盤の整備や公害のない工場誘致等により急速に工業化・都市化が進みました。人口も昭和40年代初めから50年代中ごろにかけて、大都市大阪等のベットタウンとして急増してきましたが最近伸び率が鈍化しています。そうした中で、大和平野地域に人口が集中する一方、その他の地域では過疎化、高齢化が一段と進みました。そこで、美しい自然環境のもとで、健康で豊かな家庭生活を築きつつ平和で楽しい社会生活を共にし、世界各国とも直結した奈良県づくりの指針として、昭和59年に「奈良県長期基本構想」を策定しました。さらに、その後の社会経済情勢の変化、構想・計画段階であった事業の具体化も進んだため、「奈良県長期基本構想(修正)」を策定しました。そして、平成7年には社会の新たな潮流や本県の特長・課題を踏まえ、「奈良県新総合計画」を策定しました。

新しい世紀を迎えて

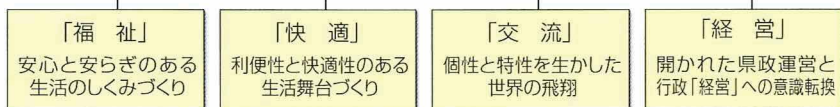
本県では、21世紀幕開けの平成13年度からの5か年の県政を推進するための運営方針となる「奈良県新総合計画後期実施計画」を策定しました。

この計画では、子育て、健康、教育など県民共通の身近な課題を重視し、また、急速に進展・変化する様々な社会・経済情勢に先見性をもって的確に対応しつつ、本県の魅力をさらに高めることをめざして、主導的・重点的に取り組む14のリーディングプランを提示するとともに、数多くの施策・事業を県政の各分野にわたって具体的に示しています。

これらの諸施策を積極的に推進し、今後とも本県の特長を最大限に生かし、新しい時代にふさわしい個性と魅力に満ち、内外から注目されるような存在感のある「世界に光る奈良県づくり」をめざします。

「世界に光る奈良県づくり」のリーディング(主導的)プランの概要

基本目標 世界に光る奈良県づくり



福祉

- 「なら」悠々子育てプラン
保育、雇用、保健医療、教育、住環境などの総合的な少子化対策を推進します。
- 健康いきいき長寿社会の推進
高齢者や障害者がいきいきと生きがいを持って積極的に社会参加し、安心して暮らせる社会を実現する施策を推進します。
- 教育改革の推進
豊かな人間性と想像力をもつ21世紀を担う子どもを育てていくため、学校、家庭、地域社会が連携・協力して取り組む施策を展開します。
- 協働する社会環境の形成
人権が尊重され、男女がともに参画できる社会づくりを推進するとともに、地域社会におけるボランティア活動などを推進します。
- 暮らしに信頼を築く安心・安全プラン
食品の安全性の確保や主体的な消費生活を営むための支援、災害に強い県土づくりと災害発生時の安全・安心の確保を図ります。



子育てサークル



奈良県防災行政無線統制室

快適

- 明日の奈良を築く交通ネットワークの形成
「なら・半日交通圏道路網構想」の実現など、交通ネットワークの整備を推進します。
- 新たな芽を伸ばす産業の育成
新しい価値に着目し、IT、環境などの新たな時代に対応して、本県産業の発展の芽を育成します。
- ふるさと「なら」ルネッサンスの展開
新たにふるさとを感じられる文化の創造を進めることにより、新しいふるさと「なら」を再構築していきます。
- ごみゼロ社会への環境づくり
地域から地球的規模までの様々な環境問題が深刻化するなか、資源循環型社会の実現に向けた総合的な施策を展開します。
- 清らかで豊かな水と共生する生活基盤づくり
水資源の開発、水道の整備、水質の浄化、親水空間の整備などを行い、豊かで清らかな水の恵みを受用できる水環境社会を創造します。



南阪奈道路の開通



なら産業活性化プラザでの技術指導

交流

- 歴史文化首都「なら」の創生
多彩な交流活動を通じて国内外に貢献するとともに、多くの人々が「関西の憩いのオアシス」として感じ、訪れ、集う世界レベルの交流拠点となっている奈良県～『歴史文化首都「なら」』～の創生をめざします。
- 「IT戦略」推進プラン
情報通信技術を積極的に活用し、県民サービスの向上、世界との交流及び産業の振興など、県民がIT革命の恩恵を最大限に享受できる施策を展開します。
- 中山間地域の新たな魅力の創造
豊かな自然や歴史的文化資源の活用、地域間交流を進め、地域の新たな魅力の創造に取り組みます。



平城京・大極殿完成イメージ

経営

- 開かれた行政「経営」の推進
「開かれた県政運営」の推進や行政「執行」から行政「経営」への意識転換などを進めるため、新しい行財政システムの構築に取り組みます。



県立医科大学

県 政

奈良県年表

西 暦	年 月 日	事 項
1868年	慶応 4年 1月 21日 5月 19日 7月 29日	大和鎮台が設置され、のち2月1日大和国鎮撫総督府と改称した。 奈良県を置き、(知事春日仲襄) これを管領する。 奈良県は奈良府と改称した。
1869年	明治元年 9月 8日 2年 6月 17日 ~24日	明治と改元 各藩は版籍を奉還し、それぞれ旧藩を県とし知藩事を置く。 (郡山県一柳沢氏15.1万石、高取県一植村氏2.5万石、柳本県一芝村県一織田氏各1万石、橿羅県一永井氏1万石、小泉県一片桐氏1.1万石、柳生県一柳生氏1万石、田原本県一平野氏1万石の8県)
1870年	7月 17日	奈良府は奈良県と改称した。
1871年	3年 2月 27日 4年 7月 14日	奈良県の一部(旧宇智、吉野郡)を分け五條県を置く。 廃藩置県により大和国内に奈良県、五條県のほか、郡山県、高取県、小泉県、柳生県、田原本県、柳本県、芝村県、橿羅県、和歌山県、津県、久居県、壬生県、大多喜県が誕生する。
	11月 22日	奈良・五條を含む15県を廃止し、奈良県を設置、県内に添上・添下・平群・山辺・式上・式下・十市・宇陀・高市・広瀬・葛上・葛下・忍海・宇智・吉野の15郡に分け統轄(県令四条隆平)する。
1876年	9年 4月 18日	堺県に合併される。
1881年	14年 2月 7日 11月 29日	堺県が大阪府に合併される。大和15郡を4連合郡役所で所管。 大和国一覧表によれば15郡261町1,333村で戸数99,005戸、476,709人となっている。
1887年	20年11月 4日 12月 1日 27日	大阪府から分離して奈良県が再設置された。 奈良県開庁(知事に税所篤) 第1回奈良県議会議員35名の当選告示
1888年	21年 1月 9日	第1回奈良県議会議員が東大寺大仏殿回廊において開かれた。
1889年	22年 4月 1日	町村制が施行された。(10町142村2組合村)
1895年	28年12月 15日	県庁舎が落成し移庁式を奉行する。
1897年	30年 8月 1日	郡制の実施、添下・平群を合わせて生駒郡、式上・式下・十市を合わせて磯城郡、広瀬・葛下を合わせて北葛城郡、葛上・忍海を合わせて南葛城郡とし、添上郡、山辺郡、宇陀郡、高市郡、宇智郡、吉野郡を合わせて10郡となり、各郡に郡役所を設置する。
1898年	31年 2月 1日	添上郡奈良町に市制を施行する。
1926年	大正15年 7月 1日	郡役所廃止
1942年	昭和17年 7月 1日	県内7カ所に地方事務所設置
1947年	22年 4月 5日	初の公選知事選挙が行われた。
1955年	30年 9月 17日	地方事務所を廃止
1956年	31年10月	吉野熊野特定地域総合開発計画が閣議決定された。
1963年	38年11月	奈良県新総合開発計画を策定した。
1965年	40年 3月 18日	新県庁舎竣工
1968年	43年 3月	第2次奈良県新総合開発計画を策定した。
1973年	48年 3月	奈良県長期基本計画(第3次)を策定した。
1978年	53年 3月	奈良県長期基本計画(第3次)[修正計画]を策定した。
1984年	昭和59年 4月 9・10月	奈良県長期基本構想を策定した。 わかかくさ国体を開催した。
1987年	62年11月 4日 12月 1日	奈良県置県100年を迎えた。 第200回奈良県議会議会を開催した。
1988年	63年 3月 28日	関西文化学術研究都市(奈良県域)の建設に関する計画が内閣総理大臣の承認を得た。
	4~10月	なら・シルクロード博を開催した。
1991年	平成 3年10月 1日	香芝町の市制施行により10市20町17村となる。
1992年	4年 2月	奈良県長期基本構想(修正)を策定した。
1995年	7年 4月 9月	奈良県新総合計画を策定した。 第8回全国スポーツ・レクリエーション祭を開催した。
1996年	7月 8月	県分庁舎竣工 情報公開制度がスタートした。
1998年	10年 4月	朱雀門・東院庭園復元記念事業「平城京'98」を開催した。
1999年	11年 4月	単一農業協同組合が誕生した。
2000年	12年10月	個人情報公開制度がスタートした。
2001年	13年 3月	奈良県新総合計画後期実施計画を策定した。

市町村変遷表

明治22年	変遷	現在	
奈良市	奈良市(明31)	奈良市	
大東市	(大12)		
平城市	(昭15)		
五ヶ谷村	(昭26)		
帯解村	帯解町(昭2)		
明治村(添上郡)	(昭30)		
富雄村	富雄町(昭28)		
伏見村	伏見町(昭25)		
柳生村	(昭32)		
大東里村(添上郡)			
狭川村			
高田町	大和高田市(昭23)		大和高田市
土庫村(組合立)	(昭2)		
浮磬村	(昭16)		
孔園村	(昭31)		
西満井村	(昭32)	大和郡山市	
大和郡山町	大和郡山市(昭29)		
筒井村	(昭16)		
平治道田村	(昭28)		
矢平端村	昭和村(昭10)		
本片桐村	片桐町(昭25)	大和郡山市	
櫛本堂	櫛本町(明27)		
二階山	天理市(昭29)	天理市	
朝山	丹波市町(明26)		
福柳村	柳本町(大12)		
耳本成村	畝傍町(昭3)	橿原市	
白鴨村	橿原市(昭31)		
八公木町			
今真井村	(昭31)		
新金井村	桜井市(昭31)	桜井市	
金城村	桜井町(明23)		
桜城村	(昭17)		
武倍村	(昭29)		
多安村	(昭31)		
朝香山	(昭31)	大和三輪町	
大上村	(昭31)		
初瀬村	初瀬町(明24)		
初瀬村	(昭34)	大和三輪町	
向輪村	大和三輪町(昭30)-(昭38)		
三輪村	三輪町(明24)		

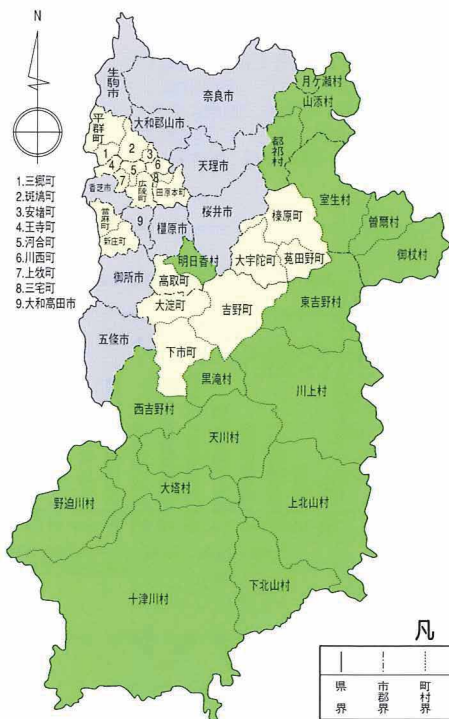
明治22年	変遷	現在
五野	條原町	野原町(昭3)
宇智	村	
阪部	村	
北智	村	
阿太	村	
牧野	村	五條市(昭32)
南宇	村	
御所	町	(昭34)
秋津	村	
掖上	村	(昭29)
葛吐	村	
葛上	村	(昭30)
田郷	村	
羅城	村	葛上村(昭31)
原村	村	
室村	村	御所市(昭33)
三鎌	村	
東松	村	
竹本	村	
西本	村	
小生	村	大正村(大4)
北生	村	
五生	村	生駒町(大10)
二位	村	
上堂	村	(昭30)
志美	村	
下美	村	(昭32)
都瀬	村	
針ヶ	村	香芝町(昭31)
都野	村	
東山	村	香芝市(平3)
波多	村	
豊原	村	月ヶ瀬村(昭43)
明治村(平群郡)	村	
三郷	村	都祁村(昭30)
章田	村	
隆寺	村	山添村(昭31)
富郷	村	
安堵	村	平群町(昭46)
川西	村	
三宅	村	平群村(明29)
田原	村	
平本	町	三郷町(昭41)
川東	村	
多野	村	竜田町(明25)
松山	村	
政始	村	斑鳩町(昭22)
神戸	村	
宇太	村	安堵町(昭61)
賀原	村	
伊那	村	川西町(昭50)
内佐	村	
室生	村	三宅町(昭49)
三本	村	
東里	村	田原本町(昭31)
曾爾	村	
	(上竜門村)	大宇陀町(昭17)
	宇太町(昭10)	
	菟田野町(昭31)	大宇陀町
	榛原町(明26)	
	(昭29)	菟田野町
	(昭30)	
	室生村(昭30)	榛原町
		室生村
		曾爾村

明治22年		変遷		現在
御高越船阪高飛新忍當磐上王馬百瀬箸河	杖取村	高取町 (明24)	高取町 (昭29)	御杖村
	智岡村			高取町
	倉合市島庄海麻城牧寺見濟南尾合	新庄町 (大12)	(昭31)	明日香村
	村			新庄町
	村	當麻村 (昭31)	當麻町 (昭41)	當麻町
	村	上牧町 (昭47)	上牧町	
	村	王寺町(大15)	王寺町	
	村	馬見町(昭28)	広陵町 (昭30)	王馬村
	村	箸尾町 (昭2)		広陵町
	村	上竜門村 (明23)	大字陀町 (昭17)	河合町 (昭46)
村	河合町			
竜門	中竜門村 (明23)	吉野町 (昭31)	吉野町	
村	竜門村 (明23)		吉野町	
吉野	吉野町 (昭3)		吉野町	
村	国樫村 (明27)		吉野町	
中莊村 (明27)				
上大下秋南	市淀市野	大淀町 (大10)	大淀町	
村	下市町 (明23)	下市町		
村	丹生村 (明45)	(昭31)	黒滝村	
芳野			黒滝村 (明45)	黒滝村
賀名生	村	西吉野村 (昭34)	西吉野村	
宗白	村		天川村	
天野	川		天野川村	
大東	塔川		大塔村	
西十津	川	十津川村 (明23)	十津川村	
南十津	川			
北十津	川			
中十津	川			
下上川	北山		下北山村	
川	上北山		上北山村	
四高小	上郷見川	東吉野村 (昭38)	東吉野村	

行政区画

市町村数
10市20町17村

奈良県行政区画図



位置

近畿の屋根といわれる山岳地帯を南部に持つわが奈良県は、わが国のほぼ中央部、紀伊半島の真ん中に位置し、周囲を山岳に囲まれた内陸県です。

	経緯度	位置
東端	東経136度14分	宇陀郡御杖村大字神末
西端	東経135度33分	吉野郡野迫川村大字弓手原
南端	北緯33度51分	吉野郡十津川村大字竹筒
北端	北緯34度47分	生駒市高山町

両極間の距離 東西 78.5 km 南北 103.6 km
県庁所在地 奈良市登大路町30番地

面積

奈良県の面積は、全国面積(377,880.25km²)の約1%の3,691.09km²です。

吉野郡十津川村は、本県最大の巨村で県総面積の18.2%を占め、672.35km²です。また、本県最小は、磯城郡三宅町で4.07km²です。(数値は平成15年10月1日現在)

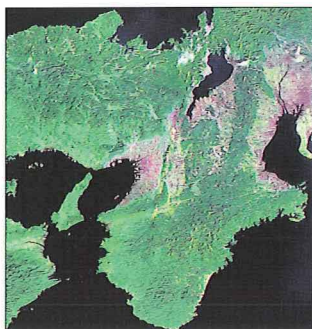
	面積	割合
奈良県	3,691.09km ²	100.0%
市部	722.67km ²	19.6%
郡部	2,968.42km ²	80.4%

地形

本県の地形は、吉野川に沿ってほぼ東西に走る中央構造線により、南部山地(吉野山地)と中央低地(北部低地)に分かれています。

北部低地帯は、瀬戸内陥落地帯の東部にあたり、断層により陥落した地溝盆地である奈良盆地を中心に、これをとりまいて生駒・葛城・笠置の各山脈、竜門山塊、奈良丘陵の山地からなっています。奈良盆地は南北30km、東西16km、面積約300km²で、海拔40~60mの非常に平坦な沖積層からなっています。河川は盆地の東南隅より流出する初瀬川を主流として、四周の河川を合して大和川となり、生駒金剛山脈を横断して大阪平野へ流出しています。

奈良盆地東側に隣接している大和高原地区は海拔400~500mの高原です。また、宇陀山地は竜門山塊の東に位置し、標高100m前後の複雑な丘陵地帯をなし、宇陀盆地と高見山麓、室生火山群地帯とからなっています。



紀伊半島

提供：(財)リモートセンシング技術センター

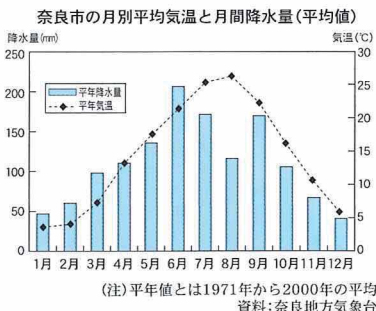
南部山岳地帯は本県の南部一帯を占める山岳地帯で、東は台高山脈を隔て三重県に、南西は和歌山県に、北辺は竜門山塊によって奈良盆地、大和高原地区に接しています。中央部は大峰山系によって十津川流域と北山川流域とに分けられ、大台ヶ原、伯母ヶ峰、山上ヶ岳、大天井岳、武士ヶ峰、天辻峠を連ねる横断山脈によって吉野川流域と分水嶺をなしています。大台ヶ原や大峰山脈は山岳美、溪谷美に富み、吉野・熊野国立公園に指定されています。

地 質

西南日本における地体構造線である中央構造線は、本県のほぼ中央部を東西に貫通しています。このため、本県は地質構造上南北の二部分に分かれ、それぞれ西南日本の外帯（南部山地）、内帯（北部低地）に属しています。これらの両地帯を構成する諸岩層はさらに古期、新期の二種類に分けることができます。従って、本県の地質は基本的には北大和（内帯）、中央帯、南大和（外帯）に三大別され各部分には古期岩層と、新期岩層とがあるので、結局六つの単元に分けられます。（参考文献：堀井甚一郎著「奈良県地誌」）

気 象

本県の気候はその地形と同様南北で大きく相違します。気候区分によると吉野川を境として、南部は山岳で占められ山岳性気候、北部は盆地で内陸性気候です。東部山地は内陸性気候と山岳性気候の特徴を兼ねています。即ち、南部の山地は夏に雨が極めて多く、時には局地豪雨が起り、冬はきびしい冬山の様相を呈し、積雪もかなり深くなります。一方、奈良盆地はおおむね雨は少なく、夏はむしろ暑く、冬は底冷えが厳しくなります。全般的には、台風のような大きな現象による影響よりも、むしろ地形の複雑さによる大雨、河川の氾濫、山・がけ崩れ等の災害と局地的な強風が目立っています。また盆地、高原地方では夏の干ばつ、冬の夜間冷却による異常低温、霜及び霧の発生等の気象災害もしばしば起ります。



人 口

石器の材料サヌカイトの山地二上山をもつ奈良県では、旧石器時代からすでに人々が活動していたことが知られています。

先史時代の遺跡数から人口を推計した研究によれば、近畿の人口は縄文時代にほぼ300～4,400人の間で推移していましたが、弥生時代には108,300人程に急増したとされています。本県の人口の推移もこれと軌を一にしていたとみられ、稲作の普及と共に人口が急増し、後の大和朝廷成立を促す社会的・経済的な基盤を確立していったのであろうと思われます。

大和に朝廷が成立し、政治・文化の中心地となると、その都の人口は巨大なものとなりました。藤原京の人口は1～3万人といわれ、これに続く平城京は少なくとも7万人前後、多く見積もって20万人の人口を持ったといわれています。仮に20万人説をとるならば、平城京内の人口密度は、14,000人/km²程になり、唐の長安よりやや少なく、平成7年の大阪市（12,510人/km²）より多くなります。7万人程であったとしても奈良の都は当時世界有数の大都市であったことに変わりありません。

また、奈良時代の平城京を除く大和の人口については13万人説と6万5千人説とがあります。当時の政府が必ずしも全ての人々を把握していないため、実際の人口はどちらの推計でももう少し多かったであろうと考えられます。

中世の人口は史料がないため知ることができませんが、江戸時代になると八代將軍徳川吉宗の時代の享保6年（1721）から始められた全国人口調査があります。第2回は同11年に実施され、以後6年毎に行われました。この調査は、武士の人口や年少者の人口が除かれていることなどいくつかの問題があり、実際の人口より幾分過小であると思われます。しかし、現存している史料によって計10回分の大和国の人口を知ることができます。

享保6年の413,331人を100とすると、天明6年（1786）には81.4（336,254人）にまで減少しましたが、文化・文政の頃から増加に転じ弘化3年（1846）には87.4（361,157人）にまで回復しています。

明治の初めには、本県の人口もほぼ実勢に近くなり、明治5年（1872）には423,004人となっています。奈良県再設置当時の明治20年（1887）には、491,185人であり、幕末以来の人口増加がさらに進んだことを示しています。

大正9年（1925）の第1回国勢調査の人口は564,607人であり、明治5年から約半世紀の間に33.5%の増加を示しました。

その後、人口は60万人程度で安定していましたが、昭和20年代には戦時中の疎開者、戦後の引き揚げ者の流入にベビーブームが重なったため、一挙に80万人近くに増加しました。昭和35年以降には盆地部での過密化と山間部の過疎化が同時に進行しましたが、県全体としては著しい人口の増加をみるようになります。国勢調査で対前回調査からの増加率をみると昭和45年で12.6%、昭和55年で12.2%の高い伸びを示しました。

しかし、昭和60年には7.9%、平成2年には5.4%、平成7年には4.0%と鈍化傾向が進み、平成12年には人口は1,442,795人で増加率は0.8%となり、昭和40年以來はじめて1%を下回りました。

このように、本県では、昭和38年以來、北西部地域が大阪という大都市の通勤圏として宅地開発が進んだこともあり、大阪を主とする他府県からの人口の流入が進み、40年代、50年代には高い転入超過を示していましたが、近年は、少子化の進行や県外からの転入者の減少などの影響により、伸び率は低下しています。

住民基本台帳人口移動報告によると、平成2年以降は転入超過も減少傾向にあり、平成10年には36年ぶりに転出超過に転じ、平成14年も5年連続で転出超過になりました。



産 業

【農業】

奈良県では、恵まれた気象条件や高い生産能力を活かして、古くから農業が発達してきました。奈良盆地には雨が少ないことから多くのため池が造られ、近世には、米の他に繭や菜種、たばこ等の商品作物が盛んに栽培され、「田畑輪換」と呼ばれる水田畑作の営農形態が確立されていました。現在は、京阪神大消費地への至近性を活かしながら高度な栽培技術を駆使した農業が行われており、県勢の発展にとって重要な役割を担っています。

大和平野地域では、米をベースに、野菜（いちご、トマト、なす、ほうれんそうなど）や「花き」（きく、ばらなどの切り花やシクラメンをはじめとする鉢花など）の収益性の高い施設栽培が盛んに行われています。

大和高原地域では、国営で開発された農地を中心に夏期冷涼な気象条件を活かしたお茶や高原野菜の生産が盛んであり、畜産や植木栽培も行われています。

また、五條吉野地域の北部でも、国営で開発された農地を中心にかきやうめなどの果樹栽培が盛んであり、かきは全国屈指の産地となっています。また、南部ではワサビ、山菜、きのこなど地域の特性を活かした特産品の生産が行われています。

県では、平成17年を目標とした「奈良県新農業農村振興計画」（新NAP）を策定し、魅力ある農業農村づくりを目指しています。

主要農産物の生産量・算出額（平成14年）

	生産量（t）	算出額（億円）	生産額全国順位
かき	27,300	52	2
荒茶（加工）	2,500	27	6
いちご	4,700	36	12
なす	8,910	21	16
ほうれんそう	5,530	24	19
切り花きく	5,160（万本）	19	7
米	50,300	129	41

資料：近畿農政局奈良統計・情報センター

【林業】

本県の林業は、県総面積の77%を占める恵まれた森林と豊富な木材の蓄積を背景に、山村地域の基幹産業の一つとして重要な地位を占めています。

吉野郡では江戸時代から植林が始まっており、森林の半数以上がスギ・ヒノキで占められ、また、明治時代には、多くの村外の地主が林業経営にのりだし、早くから民有林業が発展してきました。本県の林業は、地質と気象条件に恵まれているうえ、密植多間伐という独特な育林方法がとられているため、今では民有林1ha当たりの蓄積量は全国平均の1.4倍になっています。また、木材の輸送方法も筏流しから陸送に移ったことにより、吉野・桜井地域に木材工場が発達してきました。

しかし、昨今の林業・木材産業を巡る情勢は、安価な外材の輸入増加と国産材価格の低迷、林業生産コストの増大による生産性の悪化が進行しています。さらに森林所有者の高齢化と世代交代による経営意欲の減退や、林業従事者の減少と高齢化などにより厳しい状況にあり、このままでは森林の担っている多様な機能の維持や発揮がされないことが強く懸念されています。

森林は、木材等の林産物を生産する機能のほか、土砂の流出や崩壊を防ぐ機能、洪水や濁水を緩和し水質を浄化する機能、二酸化炭素を吸収し貯蔵する機能など多様な機能をもっています。

このため、森林の持つ多様な機能が将来にわたって持続的に発揮されるよう、適切な森林整備や保全を進め、「持続可能な森林経営」を推進していくことが森林・林業の重要な課題となっています。

本県では「森林の有する多面的機能の発揮と林業・木材産業の持続的かつ健全な発展」を林政の目標に掲げ、組政策を総合的に実施し、森林の整備や林業・木材産業の振興並びに山村地域の活性化に積極的に取り組んでおります。

【工業】

奈良県の工業の中には墨・筆・和紙・葉・漆器・素麺・清酒・茶筌・割箸・赤膚焼など、江戸時代、あるいは古代、中世にまでさかのぼる長い伝統をもつものが多くあります。

江戸時代には、奈良晒や綿織物に代表される都市手工業や農村工業が発達していました。明治7年(1874)には、奈良県は全国の中で、農具が4位、綿糸が5位、綿織物が7位、兼種油9位の生産をあげ全国でも先進的な地域に属していました。そのため資金が豊富で明治16年(1883)には早くも近代的紡績工場が設立されましたが、この工場は石炭の入手や、営業面でもおもしろいかず廃業となりました。

明治26年(1893)、同29年(1896)に新たな近代的紡績工場がそれぞれ設立、同27年に電気・同44年にガスの供給がはじまるなどめざましく近代化していきました。

しかし、奈良の位置が東西幹線からはずれていたこともあり、工業生産額が農業生産額を上回るのは大正8年(1919)にもちこされました。

昭和のはじめには、紡績業の生産は安定し木綿や緋から変わったメリヤス、貝ボタン、靴下、皮革などの地場産業の形成も進みましたが、戦争のために挫折するものが多くありました。

戦後、奈良県も復興の途につきましたが、本県の工業は農村に基盤をおく零細規模の軽工業が多く、昭和30年代の高度成長期にも繊維、木材、食品等の業種が大きなウエイトを占めていました。本県は内陸に位置し港湾を持たないので、重化学工業には工場立地の上で制約が大きかったためです。このため、昭和30年代末から県では工業団地の開発に取り組み、内陸型工業の誘致・育成に努めるとともに県内工業の活性化をめざし中小企業団地の開発を支援してきました。

昭和40年代に入って、昭和工業団地等が本格的に操業を開始すると、一般機械、電気機械の製造品出荷額等は飛躍的に増加し、その占める割合は昭和40年代初めまで、20%以下だったのが、昭和60年には30%を超えました。

奈良県の地場産業としては、靴下・ニットなどの繊維、木材、機械金属をはじめ、プラスチック形成、毛皮革製品、サンダル、スポーツ用品などがありますが、最近では、創業や経営革新への支援体制が整備され、県内の起業化シーズの発揮、育成や、県外企業の進出を促進することなどによる産業集積が図られています。



(注)統計処理上「一般機械」から「電気機械」への移動が発生したため、「一般機械」の金額が12年は大幅に減少しました。14年より「電気機械器具製造業」は「電気機械器具製造業」、「情報通信機械器具製造業」、「電子部品・デバイス製造業」へ3分割されました。

【商業】

江戸時代には門前町であった奈良町、郡山藩の城下町として栄えた郡山が、最盛期にはそれぞれ2万人以上の人口をもつ二大商業中心地でした。高田、御所なども農村加工品の流通の中心地として発展していました。しかし、このころから奈良県は大阪の経済圏に包含され、本県全体を掌握する中心地はできず、時代が明治に至ってもこの状態は変わりませんでした。

明治25年の関西線の開通、大正3年の大軌電車（現在の近畿日本鉄道）上本町～奈良間の開通をはじめとする鉄道網の整備は観光客を増やし、新たな商店街の形成をみるところもありました。

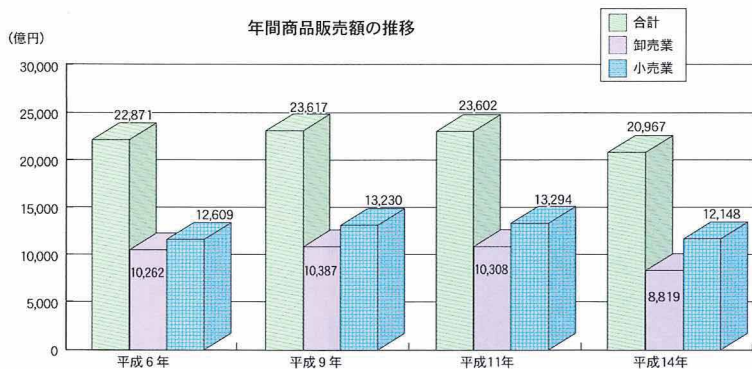
しかし、当時の商業は主に農家を相手の小規模なものが多く、大正時代には米価の下落の影響で打撃を受けるものもありました。昭和5年の国勢調査によると、商業従業者（当時の職業分類）のうち、家族の補助も受けず自分一人で営業しているものが32%も占めていました。

昭和9年には県内4銀行が統合して南都銀行が生まれ、28年には三栄相互銀行（現在の奈良銀行）が奈良市に設立され、本県に支店を持つ県外の銀行とともに奈良県の商業の発展に貢献しています。

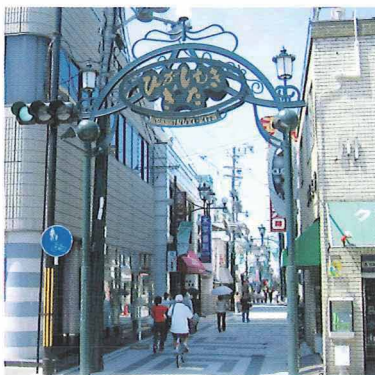
昭和40年代以降、大阪等からの人口の流入が著しく、こうした傾向は購買力を高め、商品販売額の増加に結びつきました。しかしながら平成14年の商業統計によれば、本県小売業の年間商品販売額は1兆2,148億円で、景気が停滞するなかで、前回調査に比べ減少しています。

また、今日の中小小売業を取り巻く環境は、消費者ニーズの多様化・高度化、モータリゼーションの進展、都市構造の変化による都市中心部の既存商店街と郊外の新商業集積との競争の激化などにより、厳しさを増しています。

これからの奈良県の商業の発展のためには、単なる買い物の場のみではなく、人と人とがふれあい・憩い・集う「暮らしの広場」としての商店街づくりなどが求められています。



資料：県統計課「平成14年奈良県の商業」



平成15年再整備された
ひがしむぎきた商店街

文化・観光

豊かな自然と世界に誇る重要な文化遺産に恵まれている奈良県は、古代から政治の中心として、大陸からの文化を積極的に取り入れてきました。特に古墳時代、飛鳥時代、奈良時代には遣隋使・遣唐使等の国際交流を通じて日本文化の基礎を築きあげ、さらに中世には、社寺・町屋を中心に能・狂言の発祥地として、日本文化の発展に貢献してきました。

また、近世から明治・大正・昭和にかけて多くの時代を代表する人物が、奈良の豊かな自然とそこに住む人々が育んできた伝統文化を賛美してきました。奈良は、「日本人の心のふるさと」であり、世界に誇り得る日本文化の中心となっています。

こうした奈良が育み培ってきた貴重な文化遺産や歴史的風土の保存を図るとともに、「世界に光る奈良県づくり」をめざして、新たな個性と魅力にあふれた奈良県文化を創造し、次の世代に引き継いでいくことが今後の大きな課題となっています。

本県の観光には、奈良盆地を中心とした史跡・古社寺などの文化財などをめぐる観光と、山岳地域の自然に親しむ観光の二つの面があります。

「法隆寺地域の仏教建造物」と「古都奈良の文化財」の、二つの世界遺産に代表される古社寺には、飛鳥・天平などの各時代を代表する仏像や建築物が数多くあり、そのほかにも、飛鳥・藤原・平城の宮跡や南朝のおかれた吉野の地などの史跡も多く、歴史の舞台を訪れる人々は後をたちません。

さらに、「万葉集」を中心とする古代文化に関する総合文化拠点として、平成13年9月に明日香村で開館した県立万葉文化館には、県内外から多くの人々が訪れ、中南和地域の主要な観光スポットとなっています。

また、千年以上の歴史をもつ吉野山の桜、月ヶ瀬梅溪の梅などの季節の花々や、大台ヶ原の景観、大和アルプスと称される大峰山脈を中心に2,000m級の山々が連なる吉野熊野連山の雄大な自然が、全国的に都市化の進展によって緑が失われていく中で今なお美しい姿を残し、人々のこころに安らぎを提供しています。

本県には毎年多くの観光客が訪れていますが、余暇の重要性が見直されている昨今、観光需要は今後さらに質・量ともに高くなるでしょう。こうした中で奈良県はますますその価値を高めつつあります。



玉置神社



吉野山の桜

主要山岳一覽表

(単位：m)

山 岳 名	標高	所 在 地	山 岳 名	標高	所 在 地
若 草 山	342	奈 良 市	白 鬚 山	1,378	吉野郡川上村
三 輪 山	467	桜 井 市	大 台ヶ原 山	1,695	吉野郡上北山村 (三重県境)
耳 成 山	140	檀 原 市	山 上ヶ岳	1,719	吉野郡天川村
天 香 具 山	152	〃	大 普 賢 岳	1,780	吉野郡上北山村 (天川村境)
畝 傍 山	199	〃	弥 山	1,895	吉野郡天川村
生 駒 山	642	生 駒 市 (大阪府境)	八 剣 山	1,915	吉野郡上北山村 (天川村境)
信 貴 山	437	生駒郡平群町	仏 生ヶ岳	1,805	吉野郡上北山村 (十津川村境)
二上山 (雄山)	517	北葛城郡當麻町	釈 迦ヶ岳	1,800	吉野郡十津川村 (下北山村境)
葛 城 山	959	御 所 市 (大阪府境)	涅 槃 岳	1,376	吉野郡上北山村
金 剛 山	1,125	〃	笠 捨 山	1,352	吉野郡十津川村 (下北山村境)
俱 留 尊 山	1,038	宇陀郡曾爾村 (三重県境)	玉 置 山	1,076	〃
三 峰 山	1,235	宇陀郡御杖村 (〃)	伯 母 子 岳	1,344	吉野郡野迫川村 (十津川村境)
高 見 山	1,248	吉野郡東吉野村 (〃)	護 摩 壇	1,372	吉野郡十津川村 (和歌山県境)
竜 門 岳	904	吉野郡吉野町	牛 廻 山	1,207	〃 (下北山村境)
国 見 山	1,419	吉野郡東吉野村 (三重県境)	冷 水 山	1,262	〃
池 木 屋 山	1,396	吉野郡川上村 (〃)			

資料：国土交通省国土地理院「日本の山岳標高一覧-1003-山」

主要河川一覽表

(延長 10,000m以上)

(平成15年4月1日現在)

河 川 名	延長m	上 流 端	河 川 名	延長m	上 流 端
淀 川 水 系	287,005		布 留 川	11,220	天理市菅原字下代
宇 陀 川 (黒田川を含む)	26,865	大平川合流点	岩 井 川	10,150	奈良市紀寺町字中谷
布 目 川	24,000	天理市福住町字馬返	紀 の 川 水 系	355,690	
青 蓮 寺 川	16,850	タコラ川の合流点	紀 の 川 (吉野川を含む)	70,050	吉野郡川上村 (三ノ公川合流点)
名 張 川	16,300	オオクタ川の合流点	丹 生 川	32,100	吉野郡黒滝村大字中戸
白 砂 川	14,700	奈良市横田町	高 見 川	22,300	吉野郡東吉野村大字杉谷
笠 間 川	14,400	山辺郡都祁村大字吐山	津 風 呂 川	17,600	宇陀郡大字陀町大字栗野
室 生 川	13,400	宇陀郡室生村大字田口元上田口	四 郷 川	13,200	吉野郡東吉野村大字麦谷
芳 野 川	13,240	宇陀郡菟田野町大字岩端	宗 川	12,000	吉野郡西吉野村大字西日裏
遅 瀬 川	11,800	山辺郡山添村大字切幡	新 宮 川 水 系	415,612	
打 滝 川 (今川を含む)	10,300	奈良市別所町	新宮川・熊野川 (川迫川・天川・ 十津川を含む)	113,700	吉野郡天川村大字北角
大 和 川 水 系	591,967		北 山 川	50,540	吉野郡上北山村大字西原
大 和 川	42,371	桜井市大字小夫地先	川 原 樋 川	27,800	吉野郡野迫川村大字檜股
曾 我 川	26,896	御所市大字重阪	西 川	22,100	吉野郡十津川村大字小坪瀬
寺 川	23,270	桜井市大字鹿路	東 の 川	14,500	吉野郡上北山村大字小椋
葛 城 川	23,246	御所市大字鴨神	上 湯 川	13,200	吉野郡十津川村大字上湯川
飛 鳥 川	22,296	高市郡明日香村大字栢森	西 の 川	12,900	吉野郡下北山村大字池峰
富 雄 川	21,614	生駒市高山町	神 納 川	12,300	吉野郡十津川村大字杉清
佐 保 川	14,823	奈良市中ノ川町	旭 川	11,100	吉野郡十津川村大字旭
葛 下 川	14,740	北葛城郡當麻町大字南今市	中 原 川	11,000	吉野郡野迫川村大字上
竜 田 川	13,239	生駒市俵口町	小 原 川	10,840	吉野郡大塔村大字篠原
高 田 川	13,045	北葛城郡新庄町大字南藤井			

資料：県河川課